共同研究会「ストリートの人類学」
第 7 回共同研究会（2006 年 2 月 17 日(土)　　於：国立民族学博物館）
題目：ストリートのなまけ者ーインドネシアの地方における農民と廃品回収」
（「『怠け者』とストリート：東インドネシア・クパンの廃品回収人」改題）
スピーカー：森田良成（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

＜質疑応答＞

鈴木：まず、具体的なレベルでの質問とか何か確認したいことがあれば自由にどうぞ。

長谷：人口 24 万人の内訳をもう一度教えてください。

森田：24 万人が市の総人口で、そのうちオラン・ティモールが大体 5 万人くらい。西ティモール全体ではオラン・ティモールが 60 万人くらいいる。

長谷：「オラン・ティモール」と「アトニ」は同じか。

森田：同じです。あとオラン・ロテというのは、ティモール島の近くのロテ島から来ている人びとで 5 万人ぐらいです。

長谷：それはジャワとは別なのか。

森田：別です。「オラン・ティモール」は町の会話でも結構ややこしい言い方で、ジャワ人など完全に別の地域の人びとが NTT 州の人びとについて語るときには、ティモールもロテといったいくつかの民族を全てひっくるめて「オラン・ティモール」と言ったりする。一方で、クパンに住む町の人々が、出稼ぎの人たち、山から下りてきた農民たちを指して「オラン・ティモール」と言うことがある。この場合には、民族グループとしてはアトニに属していても、町において公務員だとか、国連職員とか大学教授といった人びとのことはひとまず除外されていて、「怠け者」とか「愚か者」とかいうニュアンスで農民たちを指している。

長谷：「アトニ」という場合のニュアンスはどういうものなのか。

森田：「アトニ」というのは自称で、「アトニ・メト」などという。

国弘：「アナ・ボトル」というのが出てきたが、「アトニ」のなかのひとつのジャンルということか。

森田：町に出稼ぎに来た、山のアトニのうち、廃品回収業に就いている人々のこと。

国弘：そしてそれが特定の村から出てくる。

森田：出稼ぎ人びとの多くが、行商や屋台などの小規模のビジネスを営むジャワ人の親方のもとで働いている。廃品回収の他にも、スナックやアイスの行商をしていたりする。

山の農村から来たアトニたちが、それぞれの職業ごとに、同郷の人びとで固まっているという傾向がある。

木村：さきほどの長谷さんの名称の質問と関連して、「アトニ」と「オラン・ティモール」と「アナ・ティモール」と「アナ・ボトル」は同じと考えてよいか。

森田：「アトニ」は民族集団を指す自称で、「オラン・ティモール」も同じ民族集団をさすが、他称というかインドネシア語環境で用いられる呼称。ただし先ほど申し上げたように、ジャワとかティモール島・NTT 州からは離れた地域の人びとにとって、ティモール島のアトニとか、ロテ島の民族集団のロテとか、サブ島のサブとかといった細かい民族分類は、あまり縁がなくて、特に分類する必要がなかったりする。だからたとえば、ジャワに出稼ぎに行ったロテとかアトニの人々が、自分たち NTT 州出身の複数の民族を総称して単に「オラン・ティモール」と言ったりすることがある。「アナ・ティモール」は字面としては「オラン・ティモール」とはほとんど代わらない。辞書的な語句の意味は、「オラン＝人」で「アナ＝子」という意味。「アナ・ボトル」というのは、言葉自体は民族集団との関係はなく、廃品回収をしている人のことを指す。

木村：その人々が基本的にアトニであると。ジャワ人とは関係ない。

森田：そうですね。

木村：それで、アナ・ボトルというか、村から出稼ぎに来ている人が具体的にどういう人なのか、どういう分類というか、どういう背景を持った人なのかよくわからなかった。たとえば、何歳ぐらいで出稼ぎにでてきて、おそらく一生そこで終えるわけではないですよね、村に帰っていく。どのぐらいで帰っていくのかとか。ひとつの村からどれぐらいの人が町に出稼ぎに来ているのかとか。そういう背景的なものを教えてほしい。

森田：今回とりあげた廃品回収をしている人びとの村に関していうと、正確な人数は把握していないが、「若者なんて村にほとんどいない、みんな出てきているから。村にいても何にもすることなんかないじゃないか」ということを言う。季節にもよるが、たしかに村では、若者の男性や、働き盛りの男たちの姿があまり見られない。それで、「クリスマスになると、みな村に帰ってきて賑やかになるから楽しい」と。廃品回収人で現在 40 代の人で、クパンに初めて来たのが 20 代とか 10 代後半ぐらいのころだったという。それが現在は、もっと幼い男の子たちもクパンに来ているという状況。村の小学校を 1、2 年生で中退してきたとか、あるいは小学校に行ったことがないという子どもがいる。中にはクパンへ来るまでに、村とクパンを結ぶ幹線道路の途中にもうひとつ小さな町が

あるので、そこに何年間かいたあとでクパンに来るというケースもある。

だいたい結婚を境にして、村と町を数週間とか 1-2 ヶ月ぐらいで往復するというサイクルを取るようになる人がほとんど。結婚前の青年や少年だと、ある程度長くクパンに居続けて、1 年に 1 度、クリスマスのときにしか村に帰らなかったり。あるいは町で暮らすのに疲れたとか、飽きたとか言ってパッと村に帰ったりということもある。その場合、村に手ぶらで帰ることは恥ずかしいことなので、帰る直前に服を買って、村の生活に必要な灯油や砂糖や調味料などを買って行く。もっと大きなまとまった金額のカネを使うのは、将来家を建てる資材を買うとか、墓を作り直すとかいうときぐらい。町で 1 - 2 ヶ月で 40 万ルピアくらい稼ぎ、村では 3－4 ヶ月生活して、また町に戻ってくるという感じ。

木村 : 廃品業のバックグラウンドは。いつ頃できてきて、どれぐらいの廃品業者があって、アトニがどういうふうに結びついているのか。

森田：クパンで廃品回収が成立したのは 80 年前後だったと親方や古参の廃品回収人たちが記憶している。その当時は、子方を使って廃品を集める親方業をする者はまだ町に 3 人ぐらいしかいなかった。1 人のボスにだいたい 10～20 人の子方がいた。当時はビジネスの規模が小さくて、現在のように廃品をスラバヤまで運ぶということはなかった。金属は当時は集めていなかったし、瓶はすべて地元の小規模の酒造工場などに納めていたという。一時は家畜の骨なども集めていたという。現在は、クパンに 13 人ぐらい親方がいて、そのうちの 10 人がジャワ人。親方同士の間にも、資金の貸し借りの関係がある。廃品をコンテナに積み込んでスラバヤまで送る親方や、彼から受け取った資金と引き換えに、子方を使って集めた廃品を納める下位の親方など。子方たちは、行政単位としてはいくつかの村にまたがっているような、村の境が接している地域から来ている。彼らが語るときには、「俺たちはひとつのところ、ひとつの村から来てるんだ」と言う。

木村：同郷者を中心にして、親方のところについているという感じか。

森田：そうだ。

内藤：村と町、あるいはロテ島など周囲の島々との配置はどうなっているのか。

森田：ティモールの村の人々は、陸路で簡単に町まで来ることができる。ロテの人々は海を渡らないとクパンまで来ることができない。だからロテの人々の場合、廃品回収人のように、まだ小学校に通っている幼い子供が、村に帰っていた兄に誘われて、特別な決意や準備もなくともかく町に出てくる、ということはなかなか難しい。ロテの私の友人

などは、「ロテの人間は、ティモールの人々のようなああいう無茶な仕事はしない。」「交渉の仕方だって知っているから、ティモールの人々みたいに 1 ヶ月 10 万ルピアで働くことなんて、絶対働かない」などと語ったりする。実際には、市場で買い物客の荷物を荷車で表の道路まで運ぶという仕事をしている男の子たちの中にロテがいたり、行商をしていたり、道路わきで軽食を売っていたりしているロテの人々もいる。だがイメージとしては、体力は使うけど儲けが少ない下層労働をしているのは、「ロテやサブの人々ではなく、たいていはティモールの人々なんだ」というのがある。ロテやサブの若者がクパンに出稼ぎに来るとしたら、ティモールの人々よりはもうちょっと要領のいい仕事をしているというイメージが語られる。

玉置：結婚すると村と町で半々の生活をするということだったが、町にでてくる必要とはそもそも何か。佐賀から東京に就職して、故郷に戻ってくると錦を飾るという感じがある。やはり、町に出ると箔みたいなものがつくということか。それとも、すぐにお金になるものが欲しくて出て行っているのか。それと、村で感じる必要のなかった制約というのは、廃品業者のなかでの制約なのか、町に村からでていくことでよそ者が入ってくることで制約が発生するのか。どういうところに制約が生まれているのか。

森田：たしかに、彼らは町に出ずとも、村にそのままいれば生活していくことができる。家も土地も農作物もある。だが一方で、学校に子どもに行かせるためにカネがいる。細かい日用品の購入にも、実際問題としてカネがいる。町まで来ずとも、作った農作物を村で売ることもできる。買い取る者が、町や、村の周辺の定期市で売るために買い集めるからだ。だが、とくに若者の場合だと、「村にいても仕方がないから」といって町にでてきている。「制約」というのは、僕から見て彼らの生活は、「制約」だらけのようにも見える。都市に出てきた彼らが町で一度でも行ったことのある範囲はもちろん広い。でも彼らが町について知っている情報には、ずいぶん偏りがあると思う。

鈴木：制約と絡めて、最初の「ストリートでカネを稼ぐ」のところで、「ストリートでは緊張感をともなう、自由である、刺激がある」という説明があったが、後半の彼らの語りのところでは、彼らはずいぶんうんざりしているようだったが。「自由と刺激」はどこにいったのか。

森田：自由や刺激を端的に示すような彼らの語りを、今回きちんと挙げることができなかった。

鈴木：たくさんの語りの資料があって、今回たまたま選んだものがうんざりしたものだっ

たのか。

森田：あることはある。だが、緊張感というと、制約というマイナスな面もあるが、「町で生き延びていく」という心地よい緊張感が語られることもある。若いころからずっと町での仕事を経験してきた 40 代の人たちには、こんなにいろんなことを町でしてきたんだという一種の自負もある。それは彼らの村でも、町に出て仕事をしたことのない人々に対比して、誇らしげに語られたりする。

また「自由」にしても、たとえば村から町への移動に留まらず、ティモール島から出て「ジャワ」や「マレーシア」に行く、という話が、彼らの間で時々盛り上がることがある。しかし一時の話題としては盛り上がっても、実現することはまずない。彼らに「自負」や「自由」を見出すとして、それが一体どういうものなのかを捉えることは難しい。

鈴木：彼らがいかに虐げられているのかという語りはたくさん出ている。そして、語りをみると非常にスリム、余計なものがない。わたしが関心を持ったのはオバットの語り。ちょっとそれとは外れた、彼らの別の観念が付随してくる感じがする。あとはやはり、自由、解放を感じるような光景が今回の発表では感じられなかった。フィールドワークをやっていると、なかなか感じないということか。

森田：なかなか、個別の事例を切り取ったり、きちんと説明することが難しい。たとえば仲間たち数人で、予め親方に断って町を出て、町の周辺の集落に数週間ほど滞在して廃品回収をするということが見られる。こういうことは大人たちではなく、若者と少年たちがするが、その場合たいてい、仕事どころじゃなく、それこそ気ままに遊んで過ごしてしまう。それで結局廃品が集まらず、町に帰ってきて親方に怒られたり、あるいはそのままもう親方の元に帰ってこなかったりする。そういう「自由」を目にする機会はある。でも、ポジティブなエネルギーとか、何かを切り開いていくイメージ、というものは見えにくい。

ギル：私は年に 1 回、マニラに学生を連れて行くが、学生たちは「彼らはこんなに貧困なのになぜみんな幸せそうなのか」と必ず言う。森田さんの話を聞いて思ったのは、マニラのゴミ漁りをしている人に比べたら、彼らの生活水準は 2,3 段上という印象を受けた。笑顔の裏に何かあるといっていたが、彼らは幸せなのか、うんざりしているか。

森田：基本的に、暗い部分はあまりない。もちろん時には問題を抱えたりするが、基本的にはふつうにというか、わりと気楽な感じに生活をしている。少年たちは仕事から戻ると水浴びをして、きれいな服に着替えて、近くの公園やターミナルへ遊びにいく。彼ら

同士で、ふざけて殴り合って小競り合いをしてみたり、よく騒いで遊ぶ。

「幸せ」かどうかについて敢えていうと、彼らは「自分たちは貧しい」といいながら、「村には何だってある。自分たちはで貧しいのとは違う」と言うこともある。一方で、「俺たちが貧しいのはお前も知っとるやろ」と言うこともある。廃品回収をしている少年のなかには、町で中学校に通って、休日にだけ廃品回収をしている子がいる。そういう子は、「自分たちは貧しい」、「農民というのは、そもそも他の仕事に就けなかった人々なんだから、そりゃ貧しいに決まっているだろう」と言う。でも、「暗い」、重たい雰囲気が日常の基本にある、という感じではない。廃品回収人たちが、自分の苦労を切々と、延々と語るということはあまりない。

鈴木：じゃあ、明るいわりには、今日の発表に出てくる人は暗く見える。描き方というか、何かできるんじゃないですか。そちらの方向が。

長谷：語りのなかでLさんの語りが気になった。Lさんの話を中心にして、結びのところに書いてある棲み分け、格差、階層という問題に結びつける見通しは立たないのか。

森田：そうですね。考えてみます。ありがとうございます。

鈴木：ではほかに。

内藤：彼らは農村から出てきた人だが、出稼ぎではなくてこの仕事をやっている人はいるのか。

森田：親方につかずに、自分で荷車を所有して、集めた物を親方に売りに来る、という人がわずかにいる。

内藤：そこに棲み分けがあるのではないか。チリでダンボール収集をみていたことがあるが、そこにはものすごい細かい棲み分けがあった。親方をたてているところと個人でやっているところがあり、ルートやダンボールを取っていい場所とかも決まっていた。とすると、出稼ぎをする場合には決まった親方がいるとか、家族ごと出てくるのかとか。

森田：ルートを重ならないようにする取り決めはない。同じ1本の道を、1日に何人もの人が通る。廃品はもちろんなかなか手に入らない。彼らもそれをわかっている。「廃品がよくでる場所がある」と言って行くのだけれど、実際に行ってみても、もう他の人が持っていった後、という感じ。

玉置：そんなに皆が行くんだったら、ここに置いたら持って行ってくれるといった、捨てる側の暗黙の了解はあるのか。

森田：あまりそういうのはない。

木村：それだけ同じ道を行くにしても、人によって仕事のルートは決まっているのか。

森田：だいたい決めている人もいるが、その日の朝の段階ではまだ決めておらず、そのまま足の向くままという人もいる。とくに町の外の集落まで出て行く場合だと、みなで一緒に同じところを行くことになる。3～4 人が互いの間隔をほとんどあけずに、そのまま 1,2 時間歩いてしまうといったような。

鈴木：帰国後 1 週間ということで、あちらの現実から抜け出せていない印象を受ける。社会学的一覧表、たとえばクパン市のインフォーマルセクター、それと民族との対応関係、出稼ぎのなかのアナ・ボトル以外の職業の種類といった全体像。今後そういったところも整理してもらえるとわれわれにもわかりやすい。

松田：彼らが幸せであるかどうか、彼らの生活のなかに光明があるかどうかは森田さんが考えて判断できることだと思うが、その前に、もう少しマテリアルなデータ、鈴木さんは社会学的なデータといっていたが、基本的な地図とか産業構成とか基本的なセンサスとかも含めて。そういうデータを論文に使わない人もたくさんいるけれど、調査するときには、たとえば基本的にどれぐらいの収入があって何に支出しているかはとっている。基本的なハウスホールド・キーピングのデータはたいていみんな持っている。それは町の場合も村の場合もある。この場合だったら、両方のデータをとらないといけない。

さっき村にあまり帰っている人がいないという話だったけど、1 万人、2 万人の村じゃないと思うから、ある時点で何人帰っているか、それは 1 週間かかるかもしれないし、半年かかるかもしれない。それは論文にはしないけれど、僕もとっている。こういったマイグレーション・スタディのときのある種のマテリアルなベースというのがある。たとえば、20 代、30 代の人がこの時点で何人村に残っていて、この人はこの時点で村にどれぐらい滞在している。なんとなく 1 人に急いで聞いたら、「村に来てすぐ帰っちゃう」と答えるだろうけど、でもほんまはどうなのかとか、彼らはどれぐらいいるんだろうかとか。

畑の話もでたけれど、じゃあ、どれぐらいの畑があって、何をどれぐらい獲って、家族がいたらどれぐらい消費できるかとか。生活のベーシックスというか。その上に語りが出てくる。たとえば、もちろん中学校に行っている人は少ないかもしれないけど、小学校に行っている人はいる。それでフリーエデュケーションと言ってても、カネをとっているところは結構ある。だから小学校もいかない。じゃあ、どれぐらいお金がかかるのかとか。そういうところがあると思う。たとえば、野菜のことでやっている京大の院

生がいるが、彼女は１年単位でどれぐらいのカネが入って、どれぐらいピンはねされて、それをどこに流して、どこに行くかを取っている。それで、儲かっているのか、無駄があるというのがでてくる。行商調査をするときには、ついて回って歩行経路をマッピングする。これは論文にならないかもしれないけれど、マテリアルなベーシックスというか。出稼ぎをやるときは、家賃と仕送りというのが特徴的。アグリカルチュラル・カレンダーとかもそうだけど、論文にするかどうかは別としてベーシックスみたいなものが見えてくるのが普通だと思う。

結婚とか、マジックとか、宗教とかっていうのは丁寧な地域に根ざした背景がいる。ここではエスニック・リレーションも面白いが、それぞれの歴史的役割、彼らがつくったイメージを調べる。ソシアル・ディスタンス・サーベイをやる。そこからエスニックイメージを言える。語りから明らかにするというはひとつのやり方だが、その基盤となるものを持っていると、語りを自信を持って使える。

鈴木：小馬さんは何かありますか。

小馬：ほとんど松田さんと同じ。わたしがやっているところでは、基本的には村で暮らせるんだけれど、暮らせない場面がでてくる。松田さんが言ったように、小学校は行っていいというけど、実際にはカネがかかるとか。そういう場面になると山をおりてくる。そういう場合のパターンは同じだと思った。でも土地が細分化されたりして、村でも農作物を売って自給することができない状況が起こっている。近くのマーケットで商売をすることもできない。そういうことするためにも計算ができたり、帳簿がつけられないといけない。誰もが町へ行くわけじゃない。いちばん何もできない人が町に行く、あるいは犯罪を犯す。彼らがなぜ出てきて働こうとするのか、すべての人がそうなのかが見えてこない。

それから、ストリートを考えると、大きな舗装された道は大きな町に通じている、その先には首都がある、国際経済がある。だけどそれは村には及ばない。道の持っている力を紡いでいくような村と町の関係が描かれていなかった。

鈴木：先輩方のコメントを参考にしていただくことにしましょう。ありがとうございました。

（質疑応答部分の文責：山田香織　国立民族学博物館外来研究員）